

新日本紀行

第2集

新日本紀行

第2集

検印略

新日本紀行 第2集

定価 480円

発行者 松田 清

発行所 日本交通公社
東京都千代田区丸ノ内1-1

振替 東京 29403

印刷所 交通印刷株式会社

初版発行 昭和44年10月10日

目 次

雪の下北半島……………	井上 靖	25
弘前・暗さのなかの明るさ……………	安岡章太郎	38
節儉の遺産・米沢……………	臼井 吉見	49
早春の不動湯……………	小松 伸六	57
牛にひかれて・徳本峠……………	福田 恆存	68
追分の道 △軽井沢▽……………	村松 剛	76
渋谷の水 △東京▽……………	大岡 昇平	94
東名高速阿呆ドライブ……………	阿川 弘之	109

洛西・水尾の孤独……………	中村真一郎	123
山の辺の道・大和……………	山本 健吉	136
秋風わたる吉野山……………	高橋 義孝	149
紀の国の笑い祭り 〓日高川〓……………	北條 秀司	166
青葉山の樹海 〓若狭湾〓……………	水上 勉	178
山陽人のみた山陰……………	河上徹太郎	189
わが青春の町・山口……………	荒 正人	201
九州南端の明暗……………	岡田 喜秋	212

「旅」紀行文学賞受賞作

雪の米坂線をゆく……………	中村 光雄	224
奥遠州・水窪……………	大石 邦夫	234
三宅島のひとり旅……………	泉 次郎	247
赦免花の島・八丈……………	杉 二郎	261
孤島の巫女・沖ノ永良部……………	早川薫太郎	275
マラッカ海峡の神秘……………	尾崎 竹一	288
あとがき……………		302

ジャケット 加藤悦二
 題字 河合博一
 写真 加藤悦二・山本明

新
日
本
紀
行

第
2
集

雪の下北半島

井上 靖

1

上野発二十時十分の急行に乗る。一行は福田豊四郎画伯、読売新聞社の梶野君、野鳥の啼声の録音で知られている蒲谷さん、それに筆者の四人である。三月の声は聞いているが、東京も二月の終りからひどく寒くなっている。行先は東北の下北半島であり、その半島の突端の大間崎^{おほまき}付近で、北へ向う渡鳥の第一陣が本土を離れるのを見ようというのが、私たちのこんどの旅の目的である。私が週刊読売に「海峡」という小説を書いていて、その最後の章に本土を離れる渡鳥を書く予定なので、福田画伯、蒲谷さん、梶野君の三人を道連れにする仕儀になったのである。

夜半二時頃眼を覚まし、煙草を喫むために寝台を出て、喫煙室へ出掛ける。ひどく寒い。そこに居たボーイに訊くと、外は雪が降っているということであった。

再び寝台へ戻り、こんどは降車駅の野辺地^{のへし}へあと一時間というところで眼覚める。風が出ている。車窓から人家の屋根の雪が時々風で舞い上るのが見える。汽車が海岸線に沿って走り始めると、くろずんだ青さを持っている海を隔てて、雪に覆われた津軽半島が見えて来た。

蒲谷さんは窓から、ウミネコ、トビ、川鶴、白セキレイ、ハシブトガラスなどを見付けて、その度に、それを私たちに教えてくれる。

やがて細かい雪が舞い落ちている野辺地駅のプラットホームへ降り立つ。突き刺さるような寒気である。

下北半島方面へ行く列車の時刻までには一時間あるので、駅の改札口から一面に真白く雪の積っている広場へ出て、駅の前通りにそば屋のあるのを見付けて、そこへはいつて、時間を消すことにする。店はがらんとしている。奥のストーブの周囲に陣取って、熱い牛乳を飲む。

野辺地から下北半島へと走っている支線に乗る。野辺地から田名部^{たなぶ}駅へ着くまでは、みんな殆ど話をせずに、車窓から白一色の半島の風景に眼を当てていた。雪は落ちていたが、空はよく晴れている。白い雲、紺青の海、風除けのス、雪の丘、その丘の麓にある雪に埋もれた人家。列車は波の高い陸奥湾に沿って、雪できびしい表情の夏泊^{なつどまり}半島を対岸に見ながら進んで行く。

半島の風景は次第に荒涼たるものになって行く。汽車は長いこと波打際に近いところを走った。陸地は全く雪に覆われ、その雪面からは枯れた蘆が顔を出している。海はどういうもの

か、岸に近いところは青く、沖の方は濃い紺青を呈している。

汽車が海岸線を離れると低い丘が続き、丘には松やくぬぎが生えていて、それらが雪をかぶって寒そうに見えた。

やがて前方に、下北半島の斧型の刃の部分が現れて来た。汽車が駅々で停車すると、その度に角マキ、長靴の女たちが、野菜や魚などの箱を持って車室へ雪崩れ込んで来た。

大湊へ近づくと、蒲谷さんは次第に眼を輝かし始めた。田名部町のお医者さんで野鳥の研究家である三上士郎氏からの手紙で、大湊の海に大白鳥と黒雁の群れが来ていることを報されていたので、それらの姿を、蒲谷さんは車窓から捉えようとしていた。

下北駅を過ぎて、次の大湊駅へ行く間の入江が車窓から見えて来た時、

「いますよ、見てごらんなさい。大白鳥が居る。シノリガモがいる。ああ、いる、いる、黒雁が群れています」

蒲谷さんは言った。見るとなるほど入江の青黒い海面に、一面に小さい点がばらまかれている。白く光っているのは大白鳥で、黒いのは黒雁である。しかし、鳥と言われて初めて鳥と判るだけの話で、若し蒲谷さんから教えられなかったら、ゴミでも浮かんでいるとしか見えないだろう。

大湊駅に着くと、一同はホームに降り立った。駅の直ぐ北側に雪をかぶった山が見えている。恐山おそれざんかと思つて駅員に訊いてみると、釜伏山という山で、恐山はその向うにあるというこ

終点大畑^{おおはた}へ着くと、一同は駅で旅館を訊いて、そこへ行くために雪の道を歩き出した。往來の雪は石のように固くなって二尺程の高さになっている。

2

大畑の旅館で、私たちは七時に若い女中に起された。一番のバスに間に合うように起してくれと頼んでおいたからである。

大急ぎで洗面し、朝食を摂り、その旅館を出たのは八時十分前であった。昨日歩いた道を駅まで、軀に暖をとるために、半ば走るように歩く。

大畑町の助役さんで、「下北半島史」の著者である笹沢魯羊氏が、バスまで送って下さる。

笹沢氏の話では、この下北半島の海沿いの部落部落の家は^{こしらへ}尽く粗末な木造で、ひどく寒そうに見えるが、使つてある木材は^{あすなろ}尽く、木だということであつた。つまりひばの木である。下北半島にはひばの木が多く、ひばは、材質が強く耐久力があるので、人家の殆ど全部が、土台も、屋根も、そして障子の^{ひば}さんまで全部ひば材で造つてあるという話であつた。

「雪には強い筈ですよ。何しろ、あすなろは二月に花を咲かせ、雄しべと雌しべは吹雪の中で交配するんですからね」

笹沢氏は教えてくれた。ひばが吹雪の中で愛の営みを行うという話は、私には面白かつた。

なお、笹沢氏の話では、この下北半島のひばは藩政時代は他国へ移植することは禁じられていたそうである。明治になってから、初めて能登へ移したが容易に根付かなかった。それでもこりずに数年間移植しつづけた結果、そのうちの一本が当って漸く根付いた。

それで能登ではこの下北半島からのひばを「アテ」と呼ぶようになって今日に到っているということである。「アテ」にも「カナアテ」「マアテ」「草アテ」の三種があり、潮風とか氣候とか土壤の関係で、次第に木の肌も変り、葉にも大小ができ、もとは同じものであったが、いまは三種類になっているそうである。

駅前の下北バスの営業所の前で、そこに停まっていた大間崎おおまざき行きのバスに乗り込む。丁度その時汽車が着いたのか、駅から多勢の人が走って来て、われ勝ちにバスに乗り込んで来た。バスは忽ちにして人でふくれ上がる。

客をつめ込めるだけつめ込むと、バスは雪の道を八里先きの大間崎へ向って動き出した。大間崎まで行くバスは、これが一つだけである。恰もバスが走り出すのを待っていたかのように、また雪が落ち出した。

バスは狭い道を幾つも曲りながら、大畑の町を海岸の方へ突切って行った。道はバスの車体やがと通れるくらい狭く、その道の両側の家々は、どれも雪に埋もれている。

やがてバスはかなり大きい川を渡り、渡り切ると、その川に沿った道を走り出した。道が悪いので、車体は船のように大きく揺れている。

間もなくバスは河口に出る。河口は港になっていて、二、三十トンの発動機船が色とりどりの旗を立ててぎっしり詰まっている。乗客の話では日本海へ鱒魚に出て行く船だということだった。雪に埋もれた港で、色とりどりの旗に飾られてある小さい沢山の船を見るのは、異様な気持であった。

バスは海岸へ出ると、あとはずっと海岸線に沿って走った。雪は落ちているが、空は青く澄んでいて、海面は不気味なほど静かであった。

バスはのろのろと走った。道は海岸に迫っている丘の中腹や、断崖の裾を、屈曲の多い海岸線と併行にどこまでも続いている。裸木の梢の間から青い海面が見えたり、ゆるやかなスロープを持つ砂浜の向うに、波の碎けている荒磯が見えたりした。波打際には褐色の巨石がごろごろしていて、どの石も裾は波に洗われ、上部には白い雪を載せている。

波に吞まれそうに荒磯に立っている十二、三軒の小さい部落、半分雪をかぶった洗濯もの、薪とロープの詰め込まれてある小屋、着ぶくれた子供、老人たち。

部落は申し合せたように、海と丘に挟まれたひと握りほどの僅かな土地に置かれてあった。家々は互いに肩を寄せ合って、ひっそりと息をこらしている。

やがて海岸は一面に大小の岩がごろごろしている全くの荒磯に変わり、その荒磯はどこまでも続いている。道路の横の雪の面からは茅のようにハコネウツギが顔を覗かせている。

波は沖にだけ立っている。

九時十分ごろ、バスは小さい部落に着く。この部落の付近の海岸には波が荒れ狂っている。

「恵山岬が見えますよ」

隣席の中年の商人風の男が私に教えてくれた。見ると海上遙か遠くに雪をかぶった山が浮いている。

「氷山みたいですね」

「氷山!？」

その男はびっくりしたような顔をして、

「北海道の恵山岬ですよ」

そう、もう一度言い直した。併し、氷山というのはその時の私の実感だった。北海道の雪に包まれた白い半島は、ちょっと見ると氷山のようにであった。大体、旅行者はだれも、そんな近いところに北海道があるとは思わないだろう。

バスは、下風呂しもふろという部落で停った。ここは温泉が出ている部落で旅館らしい建物が何軒か目につく。

「大間崎まで行った都合で、今夜はここで泊りたいものですね」

すっかり寒さに参っている福田画伯は言った。実際に冷え込んでいる躰を暖い湯気のたっている浴槽に沈めたら、どんなにいいだろうと思う。

下風呂部落を過ぎる頃から、一時歇んでいた雪はまた何回目かに落ち始めた。時計を見ると